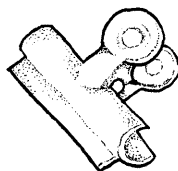


保育の中での 「疑惑」と「試行」

河邊 杲

最近、幼稚園の保育実践の場に立ち会ってき
て、数年間の研修の積み重ねと保育者の方々の成
長過程から、今まで保育の実際の中で見過した
り、軽く見・考えることしかなかった点に触れる
ことができ、数々の反省もし改めて、その意味の
重大さに驚きを感じている。その中の一つに保育

の実際の中で「疑惑」とでも言った方がよいよう
な「何だか変だな」という直感的感覚的なものが
余りうかがえないことと、持たれてはいるが、あ
る時点で切り換えられて終わっているのではないか
ということがある。保育の場では、保育者自身
が、特に担任の子ども一人一人について話されも



する。例えば「主体的な態度や自主性・自発性を育ててきているつもりでいたのに担任に伺いを立てる言動が目立つ、これは真に自発性が育っていないのではないかと思うがしかし一方でまだまだ保育者への依存的な要求が強いようにも思える」

など、実に矛盾をも感じるような思いを述べられるのに出会う。しかし、この素朴な思いのところが何時の間にか「どうして、この子はこのような行動をするのだろうか」「実際にはどうすればいいのか」などと、その因果関係的な課題に集約されたり、また方法技術的な課題に置き換えられてその追究に努力されてきている。「どうして」「どうすれば」という分析的な解明にのみ短絡的に没頭されてしまうのが私には不思議でならないのである。ロジカルなものは、そのリスクを少なくするために分析的に、コンピューターを駆使して究明していけばよいと思うが、保育の中での保育者と幼児ひとりひとりの関係で起こっている

こととそれについての保育者の極めて個人的な思いは極めてノロジカルなものが多い。「感じる」世界のを短絡的にロジカルなものとして解明していこうとするとところに無理があるように思う。

ある時はとまどって立往生することも、息をひそめて様子をうかがったりすることも当然起きるのであろう。ある子どもについて、近づき過ぎているのであれば少し離れて、時間を置いてもみるであらう。また離れ過ぎと感じれば近づいたり声をかけてみたりしてその反応を見、それをまた感じとるであらう。この動的な過程で相手自身を把えみなおすこともあらうが最初に感じた保育者自身の自分の感じとり方をも動いたり止まったり足を出したり手を出すなどの中で心と身体で確かめていくことが本来的なことではないかと思う。そしてその心と身体の動きや子どもの心や身体の動きを感じとったあるがままを記述して客観化したり

またそれを他人に聴いてもらったり読んでもらってコメントを貰ってさらに保育者自身の姿勢や考

え方などを深くもし、掘り下げて行くそのプロセスこそ保育そのものではなからうか。この過程の動きそのものを「試行」といってもよいと思う。このように考えてくると、子どもの成長に対するリスクを少なくするためのロジカルな面他にいまひとつのノンロジカルな感ずる力のとても重要なことをあらためて強く感じる。そしてこの直感的・感覚的なものはトレーニングしなければ本をよくんだり講話をきいて身につくものではない。

以前から「保育は計画的・意図的・効果的でないければならない」と指導されつつつけてきて、そのように考え、それをそのまま実践されてきた経験者が多い。未だにそこから抜けられないでいる方も多いように思う。しかし幼児への援助をつぶさに見ると、意図的、効果的にはとても行かず、臨機応変に対応せざる得ないことの方が多いこと、

また多くなってきたことは心ある方は充分感じられてきているはずである。

この臨機応変に対応できる力はノンロジカルな感じる力であることも明らかであろう。

はじめに提示した、はじめて出あった幼児との対応の中で素朴に感じられたものを短絡的に疑問や課題にしてしまわないで感じながら試行し、試行しながら感じて省察を加え保育の実践を進めて行かなければならないように思う。

なにか根本のところ、本質的なことがもっと手近なところに残っていて、それは矢張り、保育の実際を実際としてあくまでも実践を通して研修していただかねばならないのではなからうか。

私はこれを今日の課題とは言いたくない。二十一世紀に向かって生きていく道そのものであり一つの仕事そのものであるから。

(元洗足学園短期大学)